



特72

115

新話 滑稽

宮田榮馬編輯

新話 滑稽 第八千八百一十

第八千八百一十

明治十八年九月出版

滑稽 鷗 盟 社

301657-001-6

特72-115

滑稽新話八千八千草帛

宮田榮馬/編

M18.9

DBO-0001



○ 目 録

滑稽新話 數件
 可笑史記刻傳
 珍文漢文
 ○ 狂 詩 數件
 ○ 狂 歌 數件
 ○ 狂 句 數件
 ○ 都々逸 數件
 ○ 出放題 數件
 謎新題
 第一輯解當
 高知七秀

○ 凡 例

一本書ハ專ラ滑稽ヲ旨トシ看
 客諸君ノ笑諷ニ供セントス
 一欄ヲ分チテ左ノ六項トス
 ○滑稽新話 ○狂詩 ○狂歌
 ○狂句 ○都々逸 ○出放題
 一本書ハ漸次號ヲ遂フテ出版
 スルモノトス

○ 滑稽新話

種々の學科 學問の種類は種々有さうだが身分職業等に従つて異同のあるものでスカ子「然よ先其一二と述んぬ懶惰者の家業の爲宅を不出八百屋之黄瓜學、藝妓の猫利學、助的の具望學と大抵さまつて有やすテ」へ

夫蛇ア私のやうな貧弱で夏と雖も蚊帳なしで居る者おの何學が至當でせうか「ウ、夫れハ蚊が喰ふカ

飯もいろく 此頃地方の疲弊にて惘然なる談と種々ある内ハ高知縣下轄多郡某村にてハ日々食する飯に四等の差別ある由ハ第一等を盡飯といふと嫁菜蓬各三刈ハ米一合を雜せ炊く物

おて米の分と恰も螢火の如く見ゆ第二等と鏡飯といふて稀粥なれど水が多量おて米が少故人之に對すれを其顔の映るゆえおと第三等の飛飯とて三飯を二飯おて濟すといひ第四等と福貴飯といふて日々三度の食事を無事にあし得るものなり併之此第四等は一村ハ有りや無やといふ位ありといふ事だが何と不景氣に成と色々の飯名もわかる物ならずやと云を一人が「イヤまだ夫よりモ奇体な飯の名がわりやすテ某郷邊おてと賭麥飯(賭博犯)といふて此頃の困窮より仕方なしに考へ付たと云ふとなるが先づ最初碗を伏せ菜をかりて濟きて居き之後おと屹度麥飯ハ有付さ餓死を免る、妙計ゆゑのくと名々し物なるが何と奇妙な飯名でござらぬや飯名モ奇妙だお何よし

る地方の惨状に驚死やしたねへ「ナニ」歎息する
 んや及ばねへ政府でもまだく四五年すると四
 海困窮しく大飢饉にさる御見込や國朝を施行
 さる、でわなないか「イヤ此不景氣が四五年も續い
 た日にやア方々に百姓一揆が起り又之を煽動て
 飯を食ふもれび出来て世の中を騒かし所謂穀事
 飯が起るお相違ないが色々の飯名もある中お穀
 事飯と聞たおのりでも嘔吐が出さうだお如何よ
 食ふお困ると言ひ乍ら穀事飯で餓口するとは
 好きぐな人もあるものでなぬか「だが穀事飯
 の大抵免食上りの人達が別お覺るた藝もない所
 から思ひ付く所の食事だうだが。どぞいふ拍子
 の瓢箪やら餘よなつぐ元の官海に飛込む者もあ
 るそうだテ「ナニ」免食して穀事飯を遣かした者が

奉食をするやうよなるものゝれでも御用飯不
 かるううだテ
 ○ヤナ／＼招出し祝いの肴上うは鯉鮒さん鯉摺
 出し繁昌彌益とめで鯛珍間なを御最負のお恵み
 をわ河豚
 ○一寸聞き違ひ話
 ○ヤンヤの聲を受け客に好きながら
 よう嫌ふ 陽暉樓
 ○其様堅地に成すとも
 適來ろう 環樓
 ○庭園へ出て見れをはんに美しい
 花の色 花の井樓
 ○明日迄待てくれろと言ふよ貸ぬと云
 バ吾氣も意地だ

○アノ子と笑す新工風を 梅花樓
 仕組てへ 此君亭
 ○愛子の手管で始終 煙月樓
 縁結ろう 松糸樓
 ○御前之後ら私に通常棲ところへ
 先行ろう 高知樓
 ○彼樓の樓より良るのは 菊も取ふ 菊も取ふ 菊も取ふ
 彼樓ろを 菊も取ふ 菊も取ふ 菊も取ふ
 ○二人一處に庭園に行きぼたんも取ふ
 菊も取ふ 菊も取ふ 菊も取ふ
 ○花街十二秀 諸祐嗣で藝娼我が誘朋三万三
 千三百三十三迷の不通淺虚に出づして洞仙酒の
 最高總之九十六瓢より最下總も八十瓢を下らん
 と云ふチット之を戯喋歴史からの投書グース

多	枕	手	突	温	俠	風	才	待	技	愛	美
情	情	管	飛	和	氣	雅	子	遇	藝	嬌	人
此君亭	梅花樓	陽暉樓	全	陽暉樓	此君亭	陽暉樓	觀遊樓	煙月樓	陽暉樓	梅花樓	陽暉樓
小	千	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小
花	代	政	吉	花	吉	鹿	子	子	遊	香	代

○珍談書 イヤー是の門泰老よの處へ御出下
 さまました實と此節の疲弊より税金不納れ果て
 から身代限れ壹件と来て今日は裁判所より呼
 出し故出頭致さねばならぬ筈あると何分見か
 けの通り此容体では逆も出頭と難澁に付とぬか
 審断書と一通御認め下さるまいか（悉細承知合點
 何と云ふ様又書て上げやせう（チイ惣太殿魚
 心わきの水心ナニ見ず知らずの他人であらひ（悲
 意れお前だもの譯のグーせん宜しうグス硯と出
 し給へ

珍斷書

諸方村三千七百萬番地ノ内

百姓 河合惣太

右ハ四五年前不相應ニ榮耀ヲナシ旨物ヲ喰ヒ不

養生ヲ致シ候處へ苛税ヲ引キ追々身上ノ巡環惡
 シ相成リ大小不便利トナリ首ガ廻ラズ大ニ頭
 痛チ起シ引續キ臍膈ノ下痢ヲ來シ懷中ガ冷タク
 ナリ内部ノ疲弊強増相募リ米ノ飯ハタペラノヌ
 様ニナリ麥飯ナラデハ喰ヒ續キ六ヶ敷竟ニハ
 麥飯モロシク口ニ入りガタク追々ニ臍ガ于上
 リ今ハお粥サへモ喉ニ通りガタク一体ニ菜色チ
 帯ヒ候ニ付即今愚老カ草根木實ニテ手當ハ致シ
 居リ候へ日増ニ衰弱チ來シ日夜呻吟苦悶致シ
 候處チ以テ見レバ全ク流行ノ飢渴病ニ付多量ノ
 黄金散ヲ用ヒサレハ全快覺束ナキ病症ト貧斷仕
 候也

明治十八年八月 醫師 小松山 問泰

高知輕濟再判所長

世野中立兼殿

一是は大變を容体書で座るねへナニ此位書い
 て置いて丁度よム加減で座らうよ
 ○聞のさむろく 「イヤー是と野真間の飢助君
 其後とか久しう相かわらずの無事で先と大慶
 ダガ細君にと近頃何様なふくらしカチ定めて
 建勝と推察致シヤスイヤモフ彼奴が此頃の不可
 解哉に之殆んど閉口致シヤスマア聞たまへ既に
 昨夜も十時と来て例れ聞えスツ込ムと彼奴の足
 を突ッ張出して去たりお僕の足へ纏わつたり
 股へさし込んだりドント持せかけたが種々薩陀
 な事をやらかすから僕も負ぬ氣になりツントお
 尻を向けて突ッてく突飛そと彼奴のなにもツ
 く吐して居たがこん事ハ實に毎晩でなんの腹
 立てやらかすかトントわからずやの隊長であら

ラアハ、、、ろりやお手まゑ氣が死かぬと
 云ふものだ全体お手まへと此頃情婦の方へ通イ
 ついで細君の方へ取合ぬらシコテ細君が毎
 晩聞で足を持のけていろくどやらかすれわヤ
 ツパリ一件のソレ妻足ナウるやでケスマカヲお
 手まへモナド氣を死かし今晚から細君の機嫌と
 りに生鶏卵でも澤山やらかしカノ一件の勉強が
 實肝要アスナヤううかぬナ 上町愚童子稿
 ○投縛犯 熊公どうだへ「チ、誰カト思へば
 手前と虎公でナイカ「隣の鳩三がナアキリく
 歩メの一件と聞たかエ「一向シヲソカチ「夫
 シヤノミく放そぬトソメ字口合ダ「ナ「ソシ
 ナ鳩三がどうしのだ一盃機嫌にて川原の涼風
 より内へ戻り喉に茶附をだせと言ふと喉が茶が

沸くなるものこと夫より喧嘩をナッハギメ喚を
 打ヤラ蹴ヤラ蹴かそヤラ上下して居る所へ巡查
 が突然死られて引立也かんとするので鶴三のや
 つたどあり何故私しを御拘引なされますと問へ
 む巡查と其方の一六勝負をなせまに相違あるま
 むエヘン昔者と二本差々武士でござる外方をば
 詮議を願イ升と言へむ無言居るう確實なる証據
 にのみ今其方妻をころりと投たであるり
 ○刀劔會 「ホイ鹿公今日の日或る處で刀劔會
 があるうらうたが貴様はるかかぬへかナット承知お
 れも過日馬を賣て犬を其金で買て於いた一番今
 日の曳て行死見物の余興として出掛けよふかハ
 、、、おれを馬鹿にしやがつた貴様れハ剛犬

會の警察からお眼玉を頂戴ト死てゐるア、「オ
 ンの刀劔會と言ぬて刀を鑿定とることだ哩
 ○可笑史記列傳

○婢屏好男子の小傳

婢屏布團性は在原通稱を丹次郎と呼ぶ始め大日
 本土州高知本町二丁目嘘八百番屋敷唐琴屋に生
 る父彌次郎兵衛嘗く喰潰しのな死を愛ひ潮江天
 満宮お祈る一日晝寐の具ッ最中河童お尻子玉を
 抜る、と夢ひ覺めて后腰を抜かしフツ病と
 なる妻之を案じて頻り又閨房の秘密を勸め遂に
 ボテレンと改名し徒賊の男子を生じ即ち婢的是
 きなり幼に去て抜作頼馬なりと雖も容貌小奇
 麗おしく色男の風わり是時お方けりて世上の別嬪
 皆望を屬して曰く「ヤ令郎成長うあつたら嘸女

御衆が惚さるだらぎと母不幸にして乳お乏しく
 ナギヤア一と生れて以來常に乳井の赤貝に掛り
 ビーく風車を以て友とし三歳及んで君器丸
 を損ぎ醫藥を服用し漸く全快の隙父淫と貪つて
 隣家の後家と乳繰と君と妻を捨て他郷に去る君
 悲哀指く能はず濃お井と共唐琴屋を片付け高
 知を辭して遙々東京に行死行轉樂曲の喜多利北
 八君の遺孫を問ふて上谷になり三杯の飯も飯業
 に喰ひ漸く春又と延して七歳に至り菅原山武部
 源藏翁の門お入て大學朱熹章句を學ぶ毎日授か
 る處僅お一行殆んど半歳を閑して漸く子曰くの
 二字を請誦せる事を得たり君性質我儘にして頑
 是なく師匠にボン骨と喰とせ同士に尻玉を喰す
 るを以て罪に處せられ線香と水鉢を持せらる、

こと幾十回なるを知らず漸く長するお及で大酒
 を好み大へンケとなつて嘔吐を吐散し瘦犬の
 腹を肥して猶心又戀り老母爲に疎じく君を願と
 す君大い又曉る處有り奮然意と決して經師屋敷
 に加入し横山の猫上りお就て常盤津清元を學ぶ
 又曾呂利一九お泣死ゆくに父彌次郎兵衛の舊識
 あるを以て始めて滑稽酒浴と勵む君時に十三
 歳陰毛將に生せんとするの時あり死爾來頻りお
 法螺を吹死立て寢言を嘔鳴る事三年少しく其道
 の入口お通すと雖も世人未だ君を知ら老君も亦
 敢て人に告す爰を以て君を認むるは頓痴氣の言
 と下す者十中八九なるを君池酒蛙くとして平氣
 比平左衛門を氣取る

(以下嗣出)

○ 珍文 漢文

○ 某家之婦孕十三月而生子兒生而神異姓頗伶俐如四五歲之童里人奇之里正招之而試問腹內之季候曰恰似三四月之候然時々見松翠突生

○ 有一名醫呼真國手患者輻輳玄關爲市乃有容貌憔悴顏色蒼々者有身軀枯瘦筋骨兀々者或病胃者或病肺者圍一桶爐喃喃相話中者一人兩眼四呼吸迫迫病症頗重殆垂死而猶自以爲輕症却顧他病謂曰那人恐難全瘥○ 浪華新曲有紙屋某一夜行行事歡娛互極迷叫死有二三兒供在床自初而竊聞之長子年已十三早解事至其叫吓死不覺失笑母慚怒不能措措拳毆其頭一子曰打得哥哥好長兒晚

曰何故耶曰聞娘々死不哭反笑也矣

○ 一日痴友訪余茅廬時恰啖飯之際痴漢見予與飯之體裁忠告曰請君立食焉予未解其埋屈問其譯柄彼物識乎曰豈無其理乎抑當此不景氣喰込之時如君非誤之甚大者乎古語有曰坐而食者山猶盡矣豈不注意可乎

○ 力士某與俠客某交厚常相往來一夕力士訪俠客家時正盛夏夜熱如熾然無蚊聲襲席力士怪問曰貴家無蚊如何彼服君俠氣不能抗者乎俠客笑曰否々世稱余爲頭役(燒蚊)故彼恐耳後日俠客宿力士家徹夜無蚊侵衾握俠客亦怪之曰尊宅無蚤如何彼恐君腕力不能近者乎力士答曰貴兄未氣附乎力士先祖則能見宿禰少蚤也故然耳

○ 狂 詩

○ 失題

高帽美衣月紛饒。卷葺吸去出公朝。一絲電信空糊口。五斗米囊纒折腰。人望假雖歸滑鱗。快愉只在得妖猫。寄言大將休由斷官海。風波激怒潮。評 被搖出壬官海莫曝臆於枯魚之市

○ 寄奉三職於法衛友某人某

聲價夙高於大開。公平元是法官常。更非望少爲君恨。今日亦無天一坊。

評 明治聖世亦曾擬華族松平某氏爲詐欺取財大泥坊

○ 聞大阪洪水之景况

橋落舟流家又傾。漫々洪水實堪驚。餘波忽入浸遊廊。松島女郎洗足清。

評 故謂之淫川竹

○ 詠史

朝日追西難復長。驕傲取禍運所巡。邯鄲榮華只數月。一炊可憐終粟津。

評 一朝得意也。滯手握粟之僥倖。

○ 神港楠社揚弓店

拜軒兩側揚弓店。此舍彼家別嬪多。總射二十本。十錢投遊郎目的果在何。

評 當相別嬪意孽客懷中。

○ 夫婦喧嘩

亭主如雷叫。妻君似鬼噎。今早共爭厭。只待仰裁人。評 妻君怒氣如欲食附請犬殿之來臨

○ 失臍鏢金

多少金圓夙老頑。平生深匿臍間嗟。呼難有真宗。敢揮淚一朝獻本山。評 一向不顧他

忠臣庫 唐邊穆須漢賓(故人上岡薇峰遺稿)

造營相濟八幡宮。代參足利直義公。昵近諸侯
數萬供。我慢大紋五三桐。蘭奢待香薰社內。武
藏鎧文熟懷中。誰圖今日師直戀。翻作他年大
星忠。

桃井邸舎

桃井短慮肝癖勁。遺恨難忘昨日諍。兩人寄膝
談密事。一刀伐松露本性。小浪二入美麗。初本
藏五十分別盛。臨機應變即坐才。賄賂買取主
人命。

足利城館

小夜衣歌騷動元。判官似負女房。極惡口方極
井中餅作法。漫譏屋上豚。殿中人多終難忍。眉
間疵淺不晴。宛切腹顯然網乘物。可憐邸館已
閉門。
(以下次輯)

即事

淺香赤飯

立見席書群集場。于禿于童皆如狂。蚯蚓伺廻
入片角龍蛇躍。來紙中央綿屋得幸爲。棚濼筆
店含笑卸籠傷。先生恰似身代限。被記姓名處
々々張。評非席書急氣書也

祝八千々々

一體笑數無八千。猶流石愕何八千。無八千。譽
記者筆。刷出紙數又八千。

評價金亦可改八千

貴社草紙第一號。摺出早々評判高。饒於東京
團珍殿。引擔大ッ敏既足。逃

評着足處非北海道定是琉球

貴社芳名四方高。每號發免滑稽毫。新參我輩
不堪喜。推察編輯記者勞。

評無團珍滑稽讀本

○狂歌

門の戸としめる矢先へくる客に

あけて其ともいへぬ迷惑

細君が氣を揉瓜にとり添へて

お客に出だす御馳走の終

生茂るこの不景木に蟬のみか

ろの日ぐらしの人も泣らん

修羅場で一際聲をはり扇子

のり地になつて叩く軍鼓

石川どうき川竹のながれどは

品ころかはれ同じどる水

聞人より巳が方からヒヤ〜と

汗をかいたる下手な演説

世の中はどかく陽暉で暮もの

禁酔あどは得月でさし

臍栗をどりし報いか雷の

やうな異見をさく息子哉

鮎らしき妹にこゝろを掛針も

思ふやうには釣ぬ悲しさ

山畑でろだちしあかの大根も

ろばがよるとて搦み付也

汲もせでつれあく人を釣瓶

堀ぬき非戸の深き思ひを

大黒の二儀の米がたかぶもの

取ればなぐると振上た穂

這バたて立バ歩めど育てたる

其子にそねを囁られる親

貧僧がけふも供養か喰ないか

信者あつめて苦い説ほふ

○ 狂句

抜きぬしで行ても矢張這といひ
川柳によく仕はるゝ居さふらう
はつ旅の土産はいつも足のため
不届なヤツト配夫をしかりつけ
平凡職員さんせいの際ヤツト出
乗るものでいつち危険ハくち車
さろつさが母の臍くり取に来る
嘘八百あらでよぬ猫價へ八百圓
雪の肌とけたで後はあつくなり
煩惱の犬の子股間に住居をし
身を落と穴を夫ほど怖るふせ
耶穌教のアーメンとどうと佛家云ひ
紫菜八千く州の花ざり

○ 都々逸

○ 土佐國那字入都々逸
なせお今宵とことさら遅いホンニ待わび居るものを
既参りも精進するもつもる思いおとたしたさ
主のうとさがたかをか故にもしやうかどます苦勞
あがりつめたるわが身の熱も元ハ一時の出来ごゝろ
いやなお客の酒席がながをかであんさくさぬ口の中
筆にぬとせる思ひのたけをかそがとりもちするといな
どふ考へてもあきらめられぬ幾ら苦勞わするごとも

○ 出放題

- 謎新題
- 湊川の碑文トカケテ 人
- 難船れ安着トカケテ 官員

妾宅の地震のためには潰れたり
逢たいと見鯛の味は同じまど
長い手は直に後ろに廻るあり
亭主れば柿にたどへた謎い唄
若息子二の膳迄もペロリ喰ひ
ひる鳶雲をかきみと飛でゆき
牛乳で弱い子供もせいちようし
病ふきの金は利足で實がふへる
臍くりの小判丸圓で賣りわたし
手くびより天狗は鼻の脈をとり
その元トは浮た心で身をしづめ
喰ひ足らぬ奴を見立てゝ膳を据
鳥仲ケ間拔雀百舌は演んせつ家
大石はちうしん藏の土だいなり

- 豊かな百姓トカケテ 商人
- 後樂館トカケテ 牛鍋
- 解當ハ次輯

○ 第壹輯解當

- 支那政府トカケテ質屋心の李氏(利子)で持つ
- 密夫トカケテ干鳥賊心と横からちたる
- 能く賣れる店トカケテ近處の火事心と築貞半鐘がとる
- 待つ戀トカケテ塞れ河原心と小石く
- 瀛車の怪我人トカケテ俊寛僧都心と器越鬼岩で死ぬ

高知七秀

- 左の七秀と来る十月三十日迄小指名
- アランヲチ乞フ
- 滑稽家 奇人物 美男子 形容家
- 豪遊家 豪酒家 腕力家

明治十八年五月廿日出版御届
同年九月十八日刻成

(定價金五錢)

高知縣平民

編輯兼出版人

宮田榮馬

土佐郡中野町
百四十九番屋敷